

あかあなそ う えもんきようだい

# 赤穴宗右衛門兄弟

今からは五百年も昔のことです。はりまのくに かこ播磨国の加古という村に、あかあなそ う えもん赤穴宗右衛門という、いづも出雲の浪人ろうにん ははびとが母人と年わかい弟とで、ひっそりとくらしていました。ある年の春、そ う えもん宗右衛門は、ある用事でどうしてもいづも出雲へ帰らなければならなくなりました。

は せ べ さ も ん弟は長谷部左門さ も んといました。左門は、まだいづも出雲を知らないのです。

「いづも出雲といえばずいぶん遠いんでしょうね。行き帰り何日かかりましょう。お帰りの日かどぐちがはっきり分かりますと、いろんな仕度したくもしておけますし、その日には、さ も ん門口へおむかえに出ますけれど。」と左門は、さ も ん名ごりおしそうに言いました。

播磨…現在の兵庫  
県南部。  
出雲…現在の島根  
県東部。  
浪人…主人のいな  
い武士。

「私は出雲への旅なら慣れてるから、帰る日の見当もつくよ。そうだね、菊の節句の日にここへ帰ることにしようよ。」と宗右衛門は手が動く答えました。

「九月の九日ですね。それではどうぞ、そういうことにして下さい。お帰りになったら、いつしよに菊見ができますね。」

宗右衛門は、母人と二人を後に残して立って出ました。左門は、門口に立って、いつまでも後を見送っていました。背の高い宗右衛門のすがたは、やがて春がすみの中へ消えてしまいました。

月日のたつのは早いもので、そのうちに夏も過ぎて秋になりました。もう菊の花も、さきそろいました。左門たちには、待ちに待った九月の節句が来ました。左門は、その日は朝早くから、座敷のこの間に、菊の花を生けたりしてかざりつけをし、お酒やさかなの用意をしにかかりました。

すると母親は、

「お前は、そんなにさわぐけれど、出雲いづもへは百里もあるのだし、山坂の多いなんぎな旅里なのだから、宗右衛門そうえもんが今日帰ると言ったって、そうきっちり帰れるものではない。帰したくってから仕度をすればいいじゃないか。」と言いました。

「いいえ、きつと今日お帰りになります。お兄さまは、いいかげんのことを言う人ではありません。あの性分しょうぶんから言つて、今日帰ると、確たしかにおっしゃったのですから、きつとお帰りになります。もし帰られても、おもてなしの仕度したくがしてなかったら、わたしたちがお兄さまのお言葉をうたぐったようになって、はずかしい思いをしなければなりません。」

左門さもんはこう言つて、ごちそうの用意をしました。外は、晴れやかな秋晴れのいいお天気でした。朝から前の街道をいろいろの人が通ります。左門さもんは門口かどぐちへ出て、こちらへ向かって来るさむらいすがたの人を遠くから見て、おや、お兄さまかなと思つたことが二度や三度ではありませんでした。

もうお寺の昼のかねが鳴り出しました。左門はさもんお昼をすましてからまた、門口かどぐちに立ちつくしていました。とうとう日がしずみました。しかし、お兄さまはなかなか帰ってきません。

「もう、お家へお入りよ。」と母人ははびとは言いました。

「もう今日はお帰りはしませんよ。ごちそうは明日までおけるんだし、もう入ってご飯をお食べなさい。」

「どうぞ、お母さま、先にめし上って。わたしはもう少し待ってみます。きっと、帰ってみえますよ。」

左門はさもんそう言って、だんだんにたそがれていく街道をしょんぼりと見つめていました。

月が出ました。左門はさもん、そのしみじみした光をあびながら、いつまでも、門口かどぐちに立っていました。お母さまには、先に休んでもらいました。

月はだんだんに大空の真上へのぼりました。辺りの草木や地面の上には、夜つゆがじ

つとりおりました。だんだんに夜がふけて、遠くに犬のほえるのがさびしくこだまにひびいてきます。もう月も山のはに入りかけました。

さもん  
左門は、

「はてな、それでは、もう今日は、お帰りにならないのかな。」と  
思いかけました。と、ちょうどそのとき、うすぐらい街道の向こ  
うから、背の高い人が飛ぶように走って来ました。

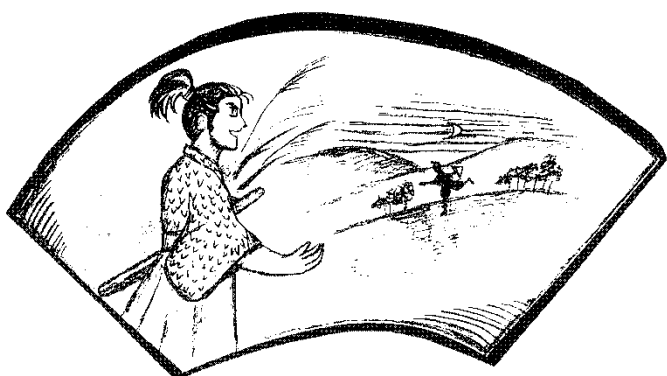
「ああ、お兄さま。」と左門は声を立てました。さもん

「おお、帰ったよ。」

「朝からお待ちしていました。今日お帰りになるとおっしゃった  
ので、きつと、まちがいはないと思って今まで待つておりました。」

「いや、どうも、おくれて、こんな夜中過ぎになってしまった。

お母さまにもお変わりはないか。」



「ええ、ずっとごじょうぶでした。今夜はお先に休んでいただきました。どんなにかお喜びでしょう。ちよつとお先へ。」

と左門さもんは走って家へ入りかけます。

「ああこれこれ。今夜はもうこんな時刻じこくだからお母さまをお起こししないであらう。あしたゆつくりお目にかかるから。」と宗右衛門そうえもんは止めました。

宗右衛門そうえもんは、足をあらってざしきへ上りました。

そして、

「あああ、帰った、帰った。とうとうお前やお母さまのところへ帰った。」と、お母さまを起こさないように小さくこう言つて、あんどんのそばにすわりました。見ると、ひどくやせて、顔色も青く、額ひたいやほほには、人がちがうくらい深いしわがよっています。

左門さもんは、いったいどうしたのでしょうか、病氣でもしていられたのかしらとびっくりしました。

「実はな、わしの帰りの、おくれたわけを話すがね。」と言いかけて宗右衛門は、ぐつたりしたように目をつぶったまま、しばらく下を向いています。

「こういうしだいだよ。富田へ帰ってみると、先君のお情けにあずかった多くの家来たちだが、その義理をもわすれて、あの城を横領した経久のやつに仕えているのだ。従弟の赤穴丹治もその一人だった。」

その丹治と経久にわしはすっかりしてやられた。経久は武術も気性もすぐれた男だが、実にずるく残にんなやつだ。経久は、わたしをかかえ上げようとして丹治と二人でたくらんだのだ。わたしはうっかり丹治のところをたずねたら、丹治はわしを一問へおしこんで出してくれない。そして経久に奉公しろと説きつけるのだ。ざしきろうのようなところへ入れて、出ようにも出させない。わしは、いついく日かにはどうしても加古へ帰る約束をしとるのだからと言っており入ってたのむのに、どうしても出してくれない。とうとう今日まで、おしこめておかれたのだ。」

富田：出雲国の月山富田城

奉公：働くこと。

「今日までとは？」と左門さもんは、首をかしげて兄の顔を見入りました。

「今日向うをお立ちになったのではありますまい。」

「そうだよ。今日立ってきたのだ。生きてる人間には一日に百里は歩けはしない。わたしにはお前がどんなに待っていてくれるかが分かっていた。もし今日帰らなかったら、私の言葉もうそになってしまふ。幸いに刀だけは許されて身につけていたので、ようやく、今日帰って来ることができた。たましいは日に千里を走るといふ言いつたえを思い出したからだ。」

こう言うといっしよに、宗右衛門そうえもんのすがたは、すうつとかき消えてしまいました。左門さもんは、宗右衛門そうえもんが自分への約束を果たすために自殺したのかとびつくりしました。

左門さもんは、夜が明けるのを待って、母人ははびとにわけを話し、出雲いづもの富田とんだへ向かって立ちました。松江まつえについて聞きますと、赤穴あかあな宗右衛門そうえもんは九月の九日の夜中に丹治たんじの邸内ていないで切腹せつぷくしたということが、だれにも知れていました。



左門さもんは丹治たんじのところへ乗りこんで、丹治たんじの仕打ちを責めた上、見事に丹治たんじを切り殺して兄あにいもうとのかたきをとりました。経久つねひさは、人の悪い男でしたが、この左門さもんの兄あにいもうとに対する愛情あいじょうにはすっかり感動して、左門さもんをとらえないように命じたので、左門さもんは無事いづもに出雲いづもをにげ出すことができました。

---

